日台関係の一考察

――「ＮＨＫのど自慢イン台湾」の実現をめぐって――

池井　優

はじめに
一　「のど自慢」の台湾開催への要望――台湾での動き
二　日本側の動き
三　東京新聞の特集記事と菅義偉総務副大臣の動き
四　北京オリンピックの終了と「ＪＡＰＡＮデビュー」問題の波紋
五　開催の決定
六　予選から本選へ
七　本選の実施
八　「のど自慢イン台湾」が残したもの

はじめに

「ＮＨＫのど自慢」はＮＨＫの誇る長寿番組である。占領政策の一環としてＧＨＱが奨励したラジオの聴取者参加番組の「のど自慢素人音楽会」（一九四六年一月）に始まり、歌のみならずものまね、漫談などを加えた「のど自慢素人演芸会」への改組、東京のみならず地方での開催、テレビの普及とともに「全国コンクール」のテレビ放映（一九五三年）、ラジオ・テレビ同時放送の実施（一九六〇年）と順調に発展し、日曜日の昼に欠かせない人気番組として定着した。(1) しかし、名司会者宮田輝アナウンサーの交代などにより一時出場希望者が四六人になるまでに人気が低迷したが、一九七〇年に歌唱に絞った「ＮＨＫのど自慢」として再スタート、出場者を二〇組に限定し、歌や土地柄の背景が判るよう出場者へのインタビューを充実させる、出場者が全員舞台後方に座る方式の確立などのリニューアルによって長く人気を保っている。(2) コンセプトとして、歌の優劣を競うのではなく、会場となる土地やその土地に生きる人々を歌を通して描く人間ショー番組である。出場者に求められるのは「明るく・楽しく・元気よく」、これがこののど自慢番組全体のカラーとなっている。それが、人気と長寿の秘訣であろう。それには生演奏へのこだわりがある。ラジオでの放送開始以来、番組ではアコーディオンやバンドなどでの生演奏をバックに出場者に歌ってもらう。カラオケと異なり、歌の途中で音程やテンポがずれても生演奏だと臨機応変に対応できる利点もあり、出場者に好評なのも長続きの理由である。

ＮＨＫのど自慢は日本国内だけではない。海外の日系人、在留邦人も毎週の放映を楽しんでいる人気番組でもある。一九九八年にはＮＨＫワールドプレミアムでの海外発信をはじめ、現在では一五〇の国と地域で視聴可能となっている。

海外でも開催して欲しい、そうした要望に応え日本移民九〇周年を記念して一九九八年二月ブラジルの首都

サンパウロでおこなわれたのが第一回「のど自慢インブラジル」であった。出場者を募集したところなんと応募総数六七四組となり、大成功となった。その後、好評に応えて海外公演は、第二回ペルーのリマ（一九九九年九月）、第三回ハワイのホノルル（二〇〇〇年五月）、第四回アルゼンチンのブエノスアイレス（二〇〇一年一〇月）、第五回アメリカのサンフランシスコ（二〇〇二年七月）、第六回中国の北京（二〇〇二年九月）、第七回カナダのバンクーバー（二〇〇三年七月）、第八回シンガポール（二〇〇三年一一月）、第九回イギリスのロンドン（二〇〇四年七月）、第一〇回韓国のソウル（二〇〇五年六月）、第一一回メキシコのメキシコシティ（二〇〇五年一〇月）……とおこなわれてきたが、台湾でも開催して欲しいとの強い要望が日台双方からわきあがったのは、二〇〇三年のことであった。

台湾でのＮＨＫのど自慢は、他の海外公演とはいささか状況が異なる。他の国が、日系人、在住日本人あるいはごく限られた現地の日本の歌好き相手の開催であったのに対し、台湾の場合は日本統治時代教育を受けた旧日本語世代、日本の演歌を愛好する中高年、ＡＫＢ48など日本のアイドルの歌を歌うことに夢中な若い世代など台湾各界の人々、また台湾でビジネスに従事、台湾企業で働く、台湾人と結婚した……といった台湾各地に滞在する日本人を対象としたことである。こうした広い層を考慮に入れての開催である。[3] また、日中国交正常化に伴い、日本は日中共同声明で「台湾は中華人民共和国の不可分の領土の一部である」との中国側の主張を入れ、「十分理解し尊重する」として台湾との外交関係を断絶した。[4] しかし、実務関係—貿易、文化交流などは存続することになり、相互に〝影の大使館〟として日本は交流協会、台湾は亜東関係協会（現・台北駐日経済文化代表処）を設置し、日本代表にはかつて外務省で大使を経験した〝大物〟が民間人として赴任している。[5] だが、文化的イベントの「のど自慢」とはいえ、中国問題など多様な要因が関連してくることが予想された。

たまたま、筆者は二〇一二年二月から四月にかけて、国際交流基金の要請により、台湾の日本研究を活性化す

る目的で、台湾国立政治大学で「戦後日本政治外交史」を講義し、各地の大学で講演、博士論文の指導などおこなうため、台湾に滞在する機会があった。滞在中、二〇一一年一〇月の「ＮＨＫのど自慢イン台湾」開催をめぐり、さまざまな動きがあったことを知り、資料を集め、関係者にインタビューすることができた。

本稿は、台湾でのＮＨＫのど自慢開催実現の過程をとりあげる。どのようなきっかけで開催要望の運動が開始されたのか、それは具体的にどう展開されたのか、実現のための阻害要因はなんであったのか、開催の決定と実現までの苦心、決定に伴う出場者の選考、観覧希望者の抽選、実施の結果などを分析するものである。

一　「のど自慢」の台湾開催への要望――台湾での動き

台湾でＮＨＫのど自慢を開催したい、こうした動きが具体化したのは、二〇〇三年のことであった。まず動いたのは、台湾側であった。二〇〇三年七月、台湾日本人会笠間和博理事長よりＮＨＫ海老沢勝二会長に宛て、台湾日本人会の総意として台北での「ＮＨＫのど自慢大会」の開催を要望する旨の書簡が出された。書簡は日台間の人的、経済的、歴史的、地理的緊密さを指摘した上、台湾では日本語世代の人々がなお日本への懐旧の情を持ち続け、また若い世代の人々は日本への強い憧れを抱いており、台湾は世界一の親日国であると論じ、そうした中で開かれる「ＮＨＫのど自慢」は必ずや台湾の人々、在留邦人に大歓迎され、日台間の友好と親善に大きな足跡を残すと信じると結んでいた。

時をおかずその月のうちに、ＮＨＫの担当局長から笠間理事長宛に、台北での開催意義は十分に理解し、早速現場で検討を始めているが、若干のリサーチ期間をいただき、改めてご返事したいとの中間報告が入った。台湾ではこの中間報告を前向きのものと受け止めた。

こうした動きを積極的に支援したのは、交流協会台北事務所に赴任した内田勝久代表であった。イスラエル、シンガポール、カナダの大使を歴任したのち、二〇〇二年五月台北に着任した内田は、日台関係をより緊密にすべくいろいろな手段を考えた。そのひとつは、断交以来三二年ぶりとなる天皇誕生日祝賀会の開催であった。二〇〇三年一二月一二日国賓大飯店でおこなわれたパーティには、亜東関係協会会長許水徳が祝辞を述べ、外交部長簡又新、国民党副主席蕭万長ら一〇〇〇人近くが参加し、盛大な会となった。中国はこれに強く抗議した。また、断交以来初めて台湾人への叙勲も実現した。長年日本語教育に功績のあった東呉大学外国語学院長兼日本語教育学会理事長でもある蔡茂豊博士に旭日中綬章を贈ることを日本政府に働きかけ、二〇〇五年に実現にこぎつけたのである。内田にとって「のど自慢」の台湾での開催はまさに望むところであった。開催を希望する会の発起人にもなり、二〇〇三年一〇月東京に一時帰国した際、NHKを訪ね、海老沢会長の代理としての担当局長に「NHKのど自慢台湾大会」の開催を直接陳情した。だが、担当局長の反応には中間報告に見られたような積極性が見られなくなっており、「のど自慢海外大会」の開催は最上層部の決定いかんにかかっているとの発言に終始するものであった。内田代表は「この頃からNHK内部に台湾開催におかしな空気が出ていたのかもしれない」と憶測した(6)。

いずれにしても、内田代表は後に引くつもりは更々なかった。それ以上に、台湾の在留邦人の間では、関係者の努力を結集して何としてでも「のど自慢台湾大会」を勝ち取るという高揚したムードが生まれつつあったのだ。同年一〇月、交流協会台北事務所主催の「日本の心、歌い継ぐ会」が開かれた際にはロビーで「NHKのど自慢台湾大会」誘致のための署名運動がはじめられた。その先頭に立ったのは、内田代表夫人に協力を依頼された松下道子（台北モラロジー研修会理事）、榊原聡子（なでしこ会会長）、大成権真弓（居留問題を考える会会長）など台湾で活躍する日本人女性であった。「皆様、あの長寿番組〝NHKのど自慢〟を台湾で開催できたら嬉しいと思

いませんか?」と「ＮＨＫのど自慢」の台湾開催早期実現のための署名活動への協力の依頼を推進していったのである。二〇〇三年一二月末までのわずか三カ月で六五一〇名の署名が集まり、松下発起人代表よりＮＨＫ海老沢会長宛に「……本当に多くの人々がＮＨＫのど自慢の公開放送が台湾で実現することを、待ち望んでいることが、今回の署名運動の結果で証明されたと言えるかと思います。どうぞ、台湾からの署名を至急にご検討頂きまして、台湾からの声をお聞き入れ頂き、台湾でのＮＨＫのど自慢の開催ができるだけ早く実現できますようお取り計らいのほど、重ねてお願い申しあげます」の手紙が出され、三冊に綴じられた署名簿がＮＨＫ台北支局へ届けられた(7)。

二　日本側の動き

一方、日本でも、二〇〇四年一月、台湾出身で信用組合横浜華銀理事長を務めた呉正男氏が会長となり「ＮＨＫのど自慢の台湾開催をお願いする会」（ＮＨＫ歌唱大会在台湾挙行促進日台会）を発足させた。「要求・要望」でなく「お願いする」と当初は甚だ低姿勢でいこうとしたことがこの会の名称に示されていた。短期間に一万四八三六名の署名を集め、同年三月八日、呉会長がＮＨＫを訪問、林純一解説委員（前台北支局長）、三浦元報道部長、白石欽一事業局担当部長と面談し署名簿を提出し早期開催を要望した。さらに、翌三月九日には財団法人交流協会日本支部を幹部三名が訪問、高橋雅二理事長、遠山茂総務部長、藤木徳司総務参与に面談、署名簿のコピーを渡し、実現についてＮＨＫに働きかけてくれるよう依頼した(8)。また、台湾の駐日代表が交代した機会も活用した。七月一八日「台湾新駐日代表許世偕先生歓迎会」の席上、主催者からの要望として「ＮＨＫのど自慢」の台湾公演の実現を提案した。許代表は就任に伴う活動として実現を目標とすると発言、実際に海老沢前会長、橋本現会

長に面談して要望してくれた。朱文清新聞組組長の呉宛の書簡によると「橋本会長が答えて言うに只今財政困難で暫くは台湾で挙行する方法はないと、それなのにその後ソウルで挙行したのはまことに遺憾である。許代表は就任以来積極的にのど自慢が台湾で挙行できるよう、別のルートをさがし求めている……[9]」とのことであった。その後、文書による要望、質疑を重ねたが、担当理事からの回答は常々冷淡で、開催に向けての確約は得られなかった。

なかなか返事の来ないことにいらだった呉会長は、海老沢会長に代わってNHK会長に就任した橋本元一に二〇〇五年八月二八日付で督促の書簡を送った。

「……先般、貴協会が韓国ソウル市に於いて〝のど自慢大会〟を開催し、これが放映された事により、台湾開催について署名を頂いた多数の方より問い合わせがありました。NHK受信料不払いの提案者もおり、当会としては返答に困惑しております。つきましては、貴協会におかれまして「台湾新幹線開通一周年記念のど自慢大会」の開催についてご検討を賜り、その実現の可能性についてご回答を得たいと存じます。甚だ勝手乍ら、本年（二〇〇五年）十月末日までにご回答を頂き、当会におきまして、今後の対応について協議したいと存じますので、宜しくお願いいたします。……[10]」

この書簡に対し、公開番組担当の畠山博治理事から九月一日付でつぎのような回答が届いた。

「……NHKではこれまで、毎年「海外のど自慢」を実施して参りましたが、初期の目的を達成したということに加え、ただいま財政の健全化を最優先の課題として取り組んでいる状況でもあり、平成十八年度以降につきましては、実施しない方向で考えています。せっかくご要請をいただきながらご期待に沿えず大変恐縮ではございますが、こうした

事情をご賢察いただき、ご了承いただきますようお願い申し上げます。……」[11]

呉会長はこの回答に満足しなかった。九月二〇日付で畠山理事宛に質問状を出した。

それは四つの点であった。

一　毎年「海外のど自慢大会」を実施していたと記憶するが、何故、台湾開催が除外されたのか

二　〝初期の目的を達成した〟とあるが、初期の目的とは、また、目的の達成とは何のことかお教えいただきたい

三　〝財政の健全化〟により海外での平成十八年度以降の実施はしない方向との事だが、海外実施と国内実施ではどのくらい支出の違いがでるのか

四　膨大な支出が予想されるが、当会の一部には、受信料不払い運動などではなく、開催のために協賛金、募金運動もしたいとの声がある

さらに、「ＮＨＫのど自慢」に出てみたいという願いは、台湾の世代の多くが共有する、それだけではなく、戦争を知らない台湾の若い世代の多くも、われわれと違った意味で日本が大好きな者が多く、その意味で、韓国、中国とは違う。是非、台湾での実施をお願いしたく、今一度、ご検討を願いたいと結んだ。[12]

九月三〇日、畠山理事から呉会長宛に返事が来た。

一　なぜ台湾を除外したか、については、ＮＨＫは財政の健全化を最優先課題として取り組んでいる状況のため「海外のど自慢」は平成十八年以降実施しない方針としたのであり、全ての地域からの要請に対し、同様の答えをしており、決して台湾を除外したものではない

二　初期の目的を達成したとは、八年間に世界の十一都市で実施し、開催回数も十回を超えたことから、すでに初期の目的は達成できたと考える

三　国内、海外の制作経費については、出演者、業者など多くの関係者との契約の問題もあり、公表できない(13)

確かに、NHKは、二〇〇四年七月元番組プロデューサーによる公費の乱用など多くの不祥事が明るみに出て世論の非難が集中、視聴者による受信料不払いの動きも活発化し、海老沢会長は辞任、橋本新会長の就任とともに財政再建を第一として、九月二〇日に「新生プラン」を公表したばかりであった。新生プランは、使命として「何人からの圧力や働きかけにも左右されず、放送の自主自律を貫く」とし、三本の柱①視聴者第一主義、②組織や業務の改革・スリム化、③受信料の公平負担を掲げた(14)。

こうして、台湾における「NHKのど自慢」の開催は可能性がなくなったと思われた。

三　東京新聞の特集記事と菅義偉総務副大臣の動き

事態が動いたのは、二〇〇六年二月一九日の『東京新聞』の「ニュースの追跡」の特集記事がきっかけであった。

「中国の声怖い?」の大きな活字を真ん中に据え、「NHKのど自慢台湾でできないわけ」を見出しに、呉会長にもインタビューし、二万五〇〇〇筆の署名簿の写真を添えた記事は浅井正智記者がまとめたものだった。「それにしても、これまで一一回の海外公演で、台湾が入っていないのは不思議な気がする。台湾には日本統治時代に教育を受けた「日本語世代」が一五〇〇万人いて、さらに日本大好きの「哈日族」と呼ばれる若者もいる。北京

やソウルではやっているのに……」と指摘し、ジャーナリスト坂本衛の「台湾で開催したら中国が抗議してくるのは明らかだ。後々取材などで不利益を受けないよう公演を避けてきたのだろう」とのコメントを載せ、とすれば、そもそも実現の見込みなどなかったことになるが、ＮＨＫ広報局が「日台間に国交がないこととのど自慢の実施とは関係がない」と否定したことを明らかにしている。さらに二〇〇五年七月に開かれたＮＨＫ経営委員会で一人の委員が次のような発言をしたことを紹介する。「のど自慢は海外でも大変好評であり、ＮＨＫの評価も高まっていると聞く。国際交流の観点からも非常に有効であり、費用がかかると思うが、できる限り継続してほしい」。この特集記事は「さて、この切実な思いをＮＨＫは何と聞くのか」と結んだ。(15)

同じ頃、二月下旬発売の『文藝春秋』二〇〇六年三月号の随筆欄にノンフィクション作家の平野久美子が「台湾で〝のど自慢〟を」と題するエッセイを寄稿した。呉らの活動を紹介するとともに「視聴者のみなさんの声をしっかり受け止め、その声を反映させる番組づくりを新生ＮＨＫが目指すなら、海外視聴者の声にも配慮して欲しい。歌を通して国際交流を図る海外〝のど自慢〟は、日本を知ってもらうためにはうってつけの企画だ。イレギュラーな形であってもよい。たとえばこの秋、日本が技術を提供した新幹線が台北—高雄に開通する。それを祝って〝台湾のど自慢〟を開催できぬものだろうか……」と応援した。(16)

『東京新聞』の特集記事を見て動いたのが、総務副大臣の菅義偉だった。菅は横浜市会議員を経て、一九九六年に神奈川二区（横浜市西区、南区、港南区）から衆議院議員に当選、自民党副幹事長、国土交通大臣政務官、産業経済大臣政務官、国会対策副委員長を歴任し、二〇〇五年総務副大臣の地位に就いていた。(17)呉とは横浜の地元を通じて旧知の仲であり、早速電話で連絡があった。呉会長は菅を副大臣室に訪ね、「ＮＨＫ会長に直接陳情したい」旨依頼した。それは実現した。二〇〇六年三月一三日橋本会長、中川潤一理事が副大臣室を来訪し、呉会長、同会顧問石戸谷慎吉、事務局長福村良治の三人と面談した。菅副大臣と総務省の清水英雄政策統括官が同席した。

「台湾では日本語世代が一五〇万人いる。それに若い哈日族一〇〇万人がいる。この方達が「ＮＨＫのど自慢」を切望している」との石戸谷顧問の訴えに対し、橋本会長は「現在ＮＨＫは受信料収入が五〇〇億円減収となっている（ちなみにＮＨＫの総予算は六七〇〇億円）。のど自慢の海外を開催しないことは平成十八年度の予算上既に決定済みである。しかし、将来海外公演再開の折には台湾を優先的に考慮する」旨表明した。短時間ではあったが、呉一行は、「我々の主旨は理解してもらえたと思う。ただ受信料不払いによる減収で、ＮＨＫ自体が存亡の危機にある」と感じた。菅副大臣は最後に橋本会長に「台湾での開催を宜しく頼む」と念を押した。橋本会長は誠実な人で大変な状況で会長を引き受けたとの印象を持ち、橋本会長の表明を誠意ある発言と受け止め、呉はこの会見の後、署名運動を終結することにしたのであった[18]。

四　北京オリンピックの終了と「ＪＡＰＡＮデビュー」問題の波紋

ＮＨＫのど自慢を台湾で開催するに当たって、問題は中国への配慮であった。特に二〇〇八年におこなわれる北京オリンピック放映に支障があることは避けるという考えがあったことは否定できない。しかし、懸念材料であった北京オリンピックは無事終わった。台湾もチャイニーズ・タイペイの名称で参加した。あとは、ＮＨＫが財政的な危機を脱し、のど自慢の海外公演が再開される、その際台湾が優先されるとの表明を信じて待つばかりとなった。だが、ここで発生したのが、ＮＨＫが台湾を取り上げた番組をめぐるトラブルであった。

二〇〇九年四月、ＮＨＫは長期大型企画「シリーズ　ＪＡＰＡＮデビュー」の放映を開始した。「世界史的視点」から日本近現代史を見つめ直すというものであった。「ＪＡＰＡＮデビュー」の第一回「アジアの〝一等国〟」は四月五日に放映された。番組は台湾でのインタビューなど現地の取材で得た証言を紹介した。「親日的と

も言われる台湾にも今に残る日本統治の深い傷。今後、アジアの中で生きていく日本が分かち合わなければならない現実だ。過去と向き合う中から見えてくる未来……」。そうしたナレーションで番組は終わる。放送直後からＮＨＫには「偏向だ」、「日本統治のマイナス面ばかり強調している」といった抗議が殺到した。その後も日台友好団体などから批判が相次ぎ、ＮＨＫへの抗議活動は活発化していった。そして五月一八日には『産経新聞』の一ページを使って「ＮＨＫの大罪――私たちはＮＨＫスペシャル「ＪＡＰＡＮデビュー」の「やらせ」取材、歪曲取材、印象操作編集の偏向歴史番組の制作と放送に抗議します」の意見広告が掲載された。(19) 賛同者のなかには、中山成彬、稲田朋美、西村真悟など衆議院議員も名を連ねていた。特に問題となったのは、「日台戦争」という用語、日英博覧会に連れて行った先住民のパイワン族を見せ物として展示する「人間動物園」と呼んだ、台湾で取材した日本語世代の人々の日本統治に対するコメントを意図的にマイナス部分だけをとりだして構成した点であった。

抗議はＮＨＫに対するデモ行進にまで発展し、五月三〇日に東京でおこなわれたデモには約一一〇〇人が参加、参加者の一部がＮＨＫ構内に入り、警官に阻止される事態にもなった。番組を問題視する動きは政界にも波及した。自民党の議員連盟「日本の前途と歴史教育を考える議員の会」（中山成彬会長）はＮＨＫに質問状を送り、(20) ＮＨＫ経営委員会でも、一部委員から「説明責任が問われている。真剣に対応すべきだ」との意見が出された。(21) 六月には小田村四郎元拓殖大学総長ら六三八九人にのぼる人たちが放送法に反した番組を見たことで精神的苦痛を受けたとしてＮＨＫに約八四〇〇万円の損害補償を求める民事訴えを東京地方裁判所に起こした。

日本ばかりでなく、台湾でも不満や批判が拡がっていった。ロンドンの日英博覧会のため渡英した先住民族パイワン族の男性が「人間動物園」として見世物になった件は、パイワン族の村の現村長は「先達が海外でわれわれの文化を広めてくれたことは村の誇りとして語り継がれている」と話し、渡英した男性の娘も、父が懐かしく

て流した涙を「悲しいね、この出来事の重さ、語りきれない」と字幕に出たが、「何と言えばいいか。（父のことは）よく分からない」とだけ言ったのに誤って伝えられたといい、日本人と一緒に小学校で教育を受けた柯徳三（八七歳）は「取材で日本統治をどう思うかと聞かれ、功罪が五分五分だと話した。社会建設や教育の普及を評価したのに、功績の部分は完全にカットされた」と朝日新聞台北支局の野嶋剛記者に語り、NHKに抗議文を送った。[22] NHKは「発言の趣旨を十分反映している」と反論し、主張は平行線をたどった。その後日本文化チャンネル桜のメンバーが台湾を訪れ、柯さんに直接インタビューしたが、自分の意図がまったく反映されていない、同意できないと言明、この発言は現在画像で確認することでできる。[23]

NHK放送総局職員が匿名で「こんなに杜撰だったJデビューの制作現場」との内部告発を月刊誌『正論』に寄稿するなど、[24] この問題はのど自慢の台湾開催のマイナス材料になるかと思われた。さらに、JAPANデビューの番組を批判し、NHK受信料不払い運動のメンバーが、台湾でののど自慢開催を推進してきたメンバーと重なる事態も発生したのだった。

五　開催の決定

NHKでのど自慢の台湾開催が正式に決定したのは、二〇一〇年一二月二四日のことであった。まさに担当者にとって最高のクリスマスプレゼントとなった。台湾での開催の可能性が出てきたのは、二〇一〇年中頃と推測される。この年六月のど自慢担当のチーフ・プロデューサーとなった中池豪平は一一月二四日に台北を訪れた。のど自慢開催可能な条件は、〝コヤ〟と〝ヒト〟である、すなわち、二〇〇〇人以上収容できる会場と手助けをしてくれる人々の存在である。会場は国父紀念館、台湾日本人会をはじめボランティアの協力者の目途もついた。[25]

開催が正式に決まった理由は定かではない。北京オリンピックの終了、ＪＡＰＡＮデビュー問題の修復、故宮博物院展の日本開催との関連、ＮＨＫ内部の混乱の収束と松本正之会長のもと新体制の発足などさまざまな要因が理由としてあげられるかもしれない。

順調にいくと思われた台湾での開催が危ぶまれたのは、年が明けて三月に東日本を襲った大震災であった。津波、火事、原発の事故……とＮＨＫは局すべてをあげて報道とその対応に追われた。この時点でのど自慢の海外開催など物理的にとても考えられない状況であった。しかし、思わぬところから道が開けることになった。東日本大震災は国際的にも大きな反響を呼び、各国、各地域、国際機関から支援、援助の申し出が相次いだが、なかでも突出したのが台湾であった。台湾からの義捐金は世界各国のなかでも最高額の二〇〇億円にも達した。他の国が政府主導であるのに対し、台湾は政府、地方自治体、民間、個人とあらゆるレベルからの貴重な援助であった。台湾の芸能界は総結集して震災チャリティを企画し、日本で被災した学生とその家族、日本に居留している華僑などが台湾の地で半月から一カ月ホームステイができるよう百軒の一時避難先を提供すると発表、航空会社は災害地域の人々の来台用の航空券を最低価格まで引き下げる措置をとった。台北の交流協会には、小学生が幼い字で書いた「加油！　日本」（ガンバレ！　ニッポン）のカード、「日本の被災地の皆さんに笑顔が戻る日を待っています」と年輩の方の筆跡と思われる日本語の手紙などが寄せられ、日本統治時代に日本語教育を受けた世代からはこころ温まる短歌が届けられた。

国難の地震と津波に襲わるる祖国護れと若人励ます
未曾有なる大震災に見舞はれど秩序乱れぬ大和の民ぞ
天災に負けずくじけずわが友よ涙も見せず鬼神をば泣かす

福島の身を顧みず原発に去りし技師には妻もあるらん

こうした台湾の動きが伝えられると日本人の間に改めて台湾への思いは強くなった。それはつぎのような動きとなって現れた。日本政府は、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、中国、韓国六カ国の大手七紙に震災に対する支援感謝の有料広告を出したが、台湾は含まれていなかった。「おかしいじゃないか」、川崎市のフリーデザイナーが簡易投稿サイト「ツイッター」で「台湾にもお礼がしたい」とつぶやいたところ賛同者が殺到した。台湾の大手紙『自由時報』、『聯合報』二紙の広告費二四〇〇万円を募集するとなんと全国から六一五件、一九三〇万円が寄せられたのである。台湾の大手紙『自由時報』、『聯合報』に日本語で「ありがとう、台湾」、中国語で「愛情に感謝します。永遠に忘れません」との感謝広告を出すことができた。(26)

こうした動きは、のど自慢の台湾での実施に追い風となった。こうして、二〇一一年五月一三日、「のど自慢イン台湾」が来る一〇月二日、台北の国父紀念館で開催されることがNHKから正式に発表された。会場の選定にもいろいろ問題があった。一万人収容可能の台北アリーナも候補にあがったが、大きすぎる。二五〇〇人が入場できる孫文を記念する国父紀念館の講堂となったが、本選は一〇月二日だが予選、器具の搬入、打ち合わせなどで四日間は必要であり、交渉の結果九月二九日、三〇日、一〇月一日、二日を押さえることができた。日本としてできれば一〇月は避けたかったのではなかったか。二〇一一年は清朝が倒れ中華民国が誕生するきっかけとなった辛亥革命百年に当たり、特に一〇月一〇日は双十節で台湾にとって建国記念日である。NHKは台湾側に、このの ど自慢大会は「辛亥革命百年、民国誕生百年とは関係ない」、あくまで台湾日本人会五〇周年、日本工商会四〇周年の記念イベントとして開催することを強調し、了解を得た。(27)

開催決定を受けて、台北では早速実行委員会が結成され、台湾日本人会理事長で台湾住友商事の董事長（社

長）でもある草野浩一郎氏が委員長に就任、台湾日本人会山本幸男総幹事などの協力を得て活動を開始した。大震災の影響で、正式決定が遅れたため、実施までの時間が限られ厳しい対応を迫られることになった。

こうして台湾日本人会台北事務所内に「ＮＨＫのど自慢イン台湾」出場もしくは観覧係（中国名――ＮＨＫ揚聲歌唱.in参加表組或参觀録影組）を置き、六月一三日から出場者と観覧希望者を募集することになった。ゲスト歌手として吉幾三、小林幸子、司会は松本和也アナウンサーが務めることも発表された。出場者の応募資格は、一、台湾在住で一五歳以上のアマチュア（年齢は二〇一一年一〇月二日現在）（出生地は問わない）、二、原則として日本の歌であることであった。応募方法はインターネット上の応募ページに必要事項を入力して、オンラインで応募するか、所定の応募用紙に必要事項を記入し、返信用封筒を同封して申し込む、二つのやり方をとった。なお、応募用紙は台湾日本人会事務所（台北、高雄）、日本人学校（台北、台中、高雄）、交流協会（台北、高雄）に置き、台北以外でも入手できるよう便宜を図った。

応募用紙に記入する必要事項は、氏名、住所、職業、婚姻状態（未婚、既婚）、家族構成、日本語能力（流暢、普通、話せない）、現地滞在期間（××年）、滞在理由（市民、仕事、学生、その他）、エントリー曲（日本の歌に限定、一曲のみ）、歌手名、出場者数（本人のみ、他×人、本人との関係）、出場の動機、選曲の理由、自己ＰＲ、なお日本人以外の応募者への質問として、エントリーした曲のほかに、あなたが歌える好きな日本の歌はありますか、あなたは日本と関係がありますか？　もしあるとすればどんなゆかりですか？　日本および日本人への印象をお聞かせください、であった。日本でならプライバシー侵害が懸念される質問も含まれているが、「番組は素人のど自慢の競演が基本であるが、会場となる土地やその土地に生きる人々を歌を通して描く人間ショウ番組である」と番組広報資料にあるように、歌の優劣を競うのではなく、台湾という土地でおこなうという背景もあって、出演者が司会者やゲストと交わすやりとり、それを楽しむ視聴者がポイントなのである。

六　予選から本選へ

番組公開の予告は反響を呼んだ。出場を希望しての応募者は一四八〇組に達した。これまでの海外公演の応募総数の最多は一九九八年、サンパウロ（ブラジル）でおこなわれた第一回の六七四組であったことを考えると、いかに台湾在住の人々の関心が高かったかが、応募者の数に示されていた。応募用紙には、日本、日本の歌への熱い思い、人生ドラマ、日台の歴史などを書き込んだものも見受けられ、なかには震える手で書かれた「ゐ」や「でせう」など旧字体、旧仮名づかいの美しい日本語のものもあり、時には事務所に写真、掛け軸など〝ゆかりの品〟を持ち込んで、是非出場させてほしいと懇願するケースまで現れた。出場、観覧とも希望者は増え続け、締め切り二週間前ともなると届く郵便物のあまりの多さに、ビルの管理人が気の毒そうに届けてくれるほどになった。(28)

一四八〇組から予選に出場する二五〇組を選出する作業がおこなわれた。まず、応募用紙に書かれた中国語を翻訳することから始めなければならなかった。特にインターネットでの応募は字数に制限がないため、延々と選曲の理由、自己ＰＲをするケースも多く、交流協会のスタッフ夫人で中国語を解するボランティア――今井理絵さんが東呉大学日本語学科大学院生許敬君の協力を得て翻訳を始めたが、昼間の事務所の時間では処理しきれず、自宅に持ち帰り、深夜までパソコンに向かったが、それでも間に合わず友人に泣きついたこともあった。(29) アルバイトで手伝ってくれた許君によると、「今井さんと日本人会のパソコンの前で中国語と日本語の微妙なニュアンスの違いに悩みながら、翻訳していった」が、高齢者は曲や日本に対する思い入れ、日本時代の想い出を綴り、若者は日本の好きな歌手の歌を歌いたいとの気持ちが前面に出、中間層はまちまちであった。(30) ただ、日本人の応

募者が予想外に少なかったので、交流協会から関係者に応募するようメールが打たれたという。

今井・許コンビによって翻訳された台湾人応募者の資料はＮＨＫの担当者に渡され、日本人応募者を含めて書類選考で二五〇組に絞り込む作業がおこなわれた。日本人と台湾人のバランス、曲目、年齢、地域、先住民族への配慮など、台湾を舞台にどのような「人間ドラマ」が展開できるかベテランの担当者が選んでいった。書類選考の結果、二五〇組が一〇月一日に国父紀念館でおこなわれる予選に出場することになった。落選した何人かから抗議がきた。「歌も聞かないでどうして落としたのだ」、「どのような基準で選んでいるんだ」、「友人には出ると言ってしまったのだ。なんとかならないか」などである。こうした人々に対し、ＮＨＫは、この番組は歌の上手さだけを競う番組ではなく、歌やパフォーマンスを通して「明るく・楽しく・元気よく」を合言葉に出演者の表情や地域の素晴らしさを伝えることを目的としている、会場や時間の制約があるので寄せられたエントリーシートを丁寧に読んで頭を悩ませながら選考作業に取り組んだとの釈明の手紙を出した。他の地域ではやらない特例であった。

予選は曲の五〇音順におこなわれる。それぞれの衣装に身を包んだ出場者は四〇秒から五〇秒歌っていく。伴奏はあくまでバンドの生演奏である。午後一時から五時間かけておこなった予選から雰囲気は盛り上がった。客席の手拍子、拍手は途切れることなく続き、二五組が残された。二五組を分類すると、台湾人一九組（先住民のペア一組）、日本人五組、日本人台湾人のペア一組となり、年齢も一九歳から八四歳、男性一三人、女性はグループで出演する七人を含め一八人、曲もポップス、演歌、叙情歌などバラエティに富んだ人選となった。翌日の本選は午後二時四五分開始だが、出場者は、音合わせや、打ち合わせのため午前中に集合した。体調を崩して降板した松本アナウンサーに代わって再びのど自慢の司会にカムバックした徳田章アナウンサーも、台北の紹介、出場者へのインタビューの材料をたんねんに集めていた(31)。

会場の国父紀念館講堂の収容能力は二五〇〇人だが、カメラなど機材を設置する関係もあって、二〇〇〇人に限定して観覧希望者を募ったところ八〇〇〇人の応募があり、抽選で決定、選に漏れた応募者には一〇月二九日(土)一八時三〇分(台湾時間)にNHKワールドプレミアムおよびNHK総合テレビで放送するのでテレビで楽しんで欲しいとの手紙を送った(32)。

招待者にも気を配った。国民党、民進党のバランスをはじめ、台湾の政界、財界、言論界など各界の実情を踏まえて招待状を発送した。悩みのひとつは李登輝元総統であった。日本と関係が深い李総統であるが、高齢であることに加え、国父紀念館講堂の階段は傾斜がきつく、付き添い、警備担当の人員も考えなければならず、招待状を送ったが、体調がおもわしくなく欠席の通知に接した関係者が〝ほっとする〟一幕もあった(33)。

七　本選の実施

一旦開催が決定すれば、担当者はいかによい番組を作るかに全力を傾ける。過去の経緯、中国への配慮、「JAPANデビュー」との関係……そうしたものは一切忘れて「のど自慢イン台湾」をいかに成功させるかだ。のど自慢はまず開催地の紹介に始まる。先乗りしたスタッフにより台北の新旧の両面を伝えるべく材料を集めた。

NHKのど自慢の開始を告げるチューブラーベルの音に合わせ、鳴り響く手拍子のなか、出場者全員が舞台に登場、司会の徳田アナウンサーの「明るく楽しく元気よく、今週は日本を飛び出して台湾の台北国父紀念館からお送りします」の第一声で幕が開いた。舞台のバックには台北の象徴一〇一ビル上空を舞う龍と故宮博物院が描かれた大きな絵が掲げられ、ゲストの吉幾三、小林幸子の二人が台湾の関わりとともに紹介される。龍の爪が三本なのも、四本は韓国式、五本は中国式で三本爪の日本の龍(のど自慢)が台湾にやってきたとのモチーフだっ

た。小林幸子は台湾への親善大使であり、東日本大震災への台湾の支援に改めて心から「謝謝」（ありがとう）と表明、場内から拍手が起こる。テレビの放映ではカットされたが、開会挨拶のなかで主催者ＮＨＫを代表して新山賢治理事が「日本で八年前から台湾開催要望の署名運動があり、二万人の署名簿を受領しております」と過去の経緯について言及し、長年にわたって努力してきた人々の労をねぎらった。

人口約二六三万人の台北市、交差点の青信号の人形が時間がせまると急ぎ足になるユーモラスな光景、市民の足である何百台というバイクの群れ、茶の入れ方、香り、味わい方の紹介、漢方薬の店が立ち並ぶ迪化街、文昌宮に参拝する人々とサトウキビのジュースをしぼる模様……といった街の光景が映像で紹介される。

歌のトップバッターは陳さんという中年の女性、孫が好きなので保育園に送る途中車のなかで聞き、「おばあちゃん、歌ってよ」とせがまれて覚えたとのエピソードが、徳田アナウンサーの巧みな話術によって引き出される。二番手は中年男性の王さん、台北のカラオケ店で同好会の仲間三〇人といつも日本の歌を歌っているという。曲は「長崎は今日も雨だった」。三番目は先住民アミ族のペア、幼馴染の二人が民族衣装でテレサ・テンの「時の流れに身をまかせ」を歌ったあと、毎年八月にアミ族の豊年祭りがあると紹介。四人目は、日本によく行く、北海道大好きという五〇代中年女性の「二人でお酒を」。ゲストの小林幸子が後から応援する。五人目は医師、百歳になったおばあちゃんに捧げる「千の風になって」。鐘三つが鳴ってはじめての合格者がでる。六番は職場の同僚日本人男性松田さんと台湾人女性陳さんが「もしかしてパートⅡ」を披露。小林幸子の持ち歌である。歌い終わった陳さんが「サチコサン、イイタイコトアリマス」、たどたどしい日本語で話しかける。「ゴケッコン、オメデトウゴザイマス」。新婚間もない小林幸子の「まあ！　ありがとう」の笑顔に場内がどっと沸く。七番は、「男酔い」を歌う台湾人中年男性、吉幾三の歌が大好きで日本までわざわざＣＤを買いに行き、新しい歌を覚えるのだという。喜んだ吉幾三が「日本に来たらウチに来てください」とリップサービス。八番は、台湾に来て一

〇年、台南在住でいつも和服で通す日本人女性、「For You」を見事に歌いあげて合格。九番は地下鉄工事事務所長として日本から長期滞在している中年男性が「浪曲子守唄」を披露。「逃げた女房に未練はないが……」の歌詞にひっかけ、「女房に逃げられないよう、連れてきました」と客席の奥さんを紹介、舞台と客席が一体となる。一〇番につづき、一一番目は日本人の三人組、長期出張で滞在中、黄色の作業服姿で「明日があるさ」を元気よく熱唱。歌はお世辞にもうまくない。はじめての鐘ひとつ。まさにこれが「NHKのど自慢」らしさなのだ。前半の一三人が終わったところで、郷土芸能の紹介の時間となる。

現在、台湾では先住民族として一四族が認定されているが、今回はタイヤル族の子どもたちが起用された。[34]金岳小学校三年生から六年生の舞踊隊による機織りと木のぼりのパフォーマンス、女の子は機織りの技術を習い、出来るようになると結婚する、男の子は木のぼりで先に上まで登った子がリーダーになる、などが紹介される。後日テレビで番組として放映された時は、歌の選考を中間にはさんだが、実際国父紀念館では、舞台を広く使う必要から郷土芸能のパフォーマンスは歌の前におこなわれ収録されたのであった。

後半は残りの一二組が出場したが、「瀬戸の花嫁」を歌った大森栄子さんは台湾人と結婚して来台した当初ホームシックにかかった経験を語り、「負けないで」を歌った日本人駐在員の奥さん二人組は東日本大震災に対する台湾の援助に「謝謝台湾」と挨拶、今回の最高齢八四歳の陳さんは「迷い鳥」、客席に「ミドリさんがんばれ」の横断幕が出る。日本語世代の陳さんは日本統治時代「ミドリ」を名乗っていたのであろう。小林幸子の歌だが、本人もあまり歌わないという。日本のいろいろな演歌を覚えて披露することが生きがいのカラオケ愛好家の典型であろうか。八四歳のつぎに登場したのは、七人のヤングギャル、インターネットで購入した黄色と黒の揃いのファッションで韓国のアイドルの歌「Mr. TAXI」を日本語で歌う。

二五組すべてが歌い終わって、ぞろぞろと帰りかける観客に「まだ終わりではありません。これからゲストの

歌の披露と審査発表がありますから、お待ちください」と呼びかける一幕もあった。六人の合格者のなかからチャンピオンは、基隆出身で入院中の母に捧げるところをこめて「暖簾」を歌い、吉幾三が「あんた、五木ひろしより上手いよ」と絶賛した四〇代の男性陳世洋さん、特別賞は日系企業に勤務し、二次会を盛り上げるのが得意という短髪の青年呂さんと決まった。

八 「のど自慢イン台湾」が残したもの

通常、国内でののど自慢は生放送だが、今回は録画のためゆったり進行し、収録が一時間も延びた。その分徳田アナウンサーの出演者との通訳を交えた会話を編集の段階で短く縮めることができ、ゲストのトークも弾んだ。収録が終わってからゲストの歌手二人から追加の歌のプレゼントがあり、特に小林幸子の感謝の念をこめての熱唱に場内の観客から「ジーンとくるものがありました」との感想が寄せられるほどであった。予選会には一一〇〇人、本選の収録日には一二〇〇人延べ二三〇〇人の日台混合ボランティアスタッフが運営に当たったが、各セクションとも大半が初対面であったにもかかわらず、まとまったチームワークで効率よくこなし、NHK関係者が絶賛した協力体制であった。特に国父紀念館はコンサートホールでなく、紀念館の展示見学をする一般入場者もいるため、玄関でのど自慢大会入場者のチェックはできず、講堂のドアの入り口でやらなければならないこともあって、関係者は最後まで気が抜けなかった。実行委員長まで揃いの制服を着て一致団結してやる姿には身分を超えた「日本人の団結の強さ」を感じた台湾人も多かった(35)。

以前から「のど自慢」の台湾開催について、努力してきた人々も報われることとなった。会場には、開催を願い自らNHKに働きかけるなど尽力し、実現を見ることなく他界した内田勝久交流協会元代表の真美子夫人の姿

や、呉会長はじめ日本国内で長年活動してきた人々の顔も見られた。

台湾の大手新聞『聯合報』はつぎのように書いた。

国父紀念館に集まった二〇〇〇人の観客は、合格した出場者とともに笑い、鐘を鳴らされて引きさがる出場者とともに泣いた。制作スタッフは「会場は明るく、温かい空気が充満していた」と語っていた。放送されるのは、まさに台湾と日本の人々の情誼を描いたドキュメンタリー番組だ。

収録の翌日、工商会の例会は国賓大飯店で開催され、徳田アナウンサーの講演「『ＮＨＫのど自慢』の歴史とエピソード」がおこなわれ満席の聴衆に大好評であった。(36)

通例ののど自慢が日曜日昼の四五分生放送であるのに対し、今回は編集され、一〇月二九日（土）のゴールデンアワー夜七時三〇分から八時四三分まで一時間一三分を使っての特別版として放映された。その影響は大きかった。「台湾はこれほど親日的な国だったのか」といった感想が多くの視聴者から寄せられた。当初の企画から延べにして八年を費やした「ＮＨＫのど自慢イン台湾」、その成功は今後の指針となろう。政治、外交を補う文化交流、特に歌を通じる国際親善は有効だ。日本、中国、韓国、台湾の「東アジアのど自慢大会」の企画など面白いのではないだろうか。

（日本音楽著作権協会（出）許諾第一二一五〇三九ー二〇一号）

（１）「のど自慢」を考えたのは、ＮＨＫ音楽部にいたプロデューサーの三枝健剛であった。愛宕山の放送局時代に邦

楽の新人テストをやっていたことや、軍隊でおこなわれていた兵隊同士の素人隠し芸娯楽会などが頭の中で結びついて「のど自慢素人音楽会」へと発展していった。「多少でも歌える人なら、どんどん合格させて放送に出したらどうか。ずぶの素人でも放送できるというおもしろさで、下手は下手なりに受けるのではないか」と考え、一九四五年一一月に「飛び入り素人のど自慢音楽会」を提案した。しかし、その時の提案は通らず、翌一二月に想を改め「のど自慢素人音楽会」として提案したところ、これが実現し、人気が出て、第一回の応募者は九〇〇名近くになった。第一回「のど自慢素人音楽会」は一九四六年一月一九日に内幸町の放送会館でおこなわれた（日本放送協会編『放送五十年史』（一九七七年、日本放送出版協会）二二二頁）。

（2）第一回の司会は高橋圭三アナウンサーだったが、その後数人が交互で行い、宮田輝アナウンサーとなり、出場者と司会者の短い会話がひとつの魅力となって人気番組となっていった（ＮＨＫアナウンサー室編集委員会編『アナウンサーたちの70年』（一九九二年、講談社）一四四〜一四六頁）。

（3）台湾と日本の歌の結びつきについては、菅野敦志『台湾の国家と文化』（二〇一一年、勁草書房）第二章、第二節の「日本」と台湾人、さらに日本演歌の台湾での受容と普及については、陳培豊「演歌の在地化—重層的な植民地文化からの自立再生の道」（西川潤・蕭新煌編『東アジア時代の日本と台湾』二〇一〇年、明石書店）所収。

（4）日中国交正常化に伴う台湾の処理については、川島真、清水麗、松田康弘、楊永明『日台関係史—１９４５—２００８』（二〇〇九年、東京大学出版会）の第四章「日華断交と七二年体制の形成」、服部龍二『日中国交正常化』（中公新書）（二〇一一年、中央公論新社）第五章「台湾—椎名・蔣経国会談という〝勧進帳〟」に詳しい。

（5）交流協会の役割については、内田勝久『大丈夫か、日台関係—「台湾大使」の本音録』（二〇〇六年、産経新聞出版）第二章「日台関係の枠組み」。

（6）内田同右書一〇四頁。

（7）松下道子発起人代表よりＮＨＫ海老沢勝二会長宛嘆願書（台湾日本人会提供）。

（8）呉正男「特別寄稿・ＮＨＫのど自慢・台湾開催」（『榕樹文化』二〇一二年春季号）。

（9）台北駐日経済文化代表処新聞組組長朱文清氏より呉会長宛書簡（呉正男氏提供）。

（10）呉会長よりＮＨＫ橋本元一会長宛書簡（呉正男氏提供）。

(11) NHK畠山博治理事より呉会長宛書簡（呉正男氏提供）。
(12) 呉会長よりNHK畠山理事宛書簡（呉正男氏提供）。
(13) NHK畠山理事より呉会長宛書簡（呉正男氏提供）。
(14) NHKの「新生プラン」について、『毎日新聞』二〇〇五年九月二一日朝刊が「ニュースの焦点」で「背水の陣、課題なお」と題して詳細に論じている。
(15) 「NHKのど自慢台湾でできないわけ」（『東京新聞』二〇〇六年二月一九日朝刊）。
(16) 平野久美子「台湾でNHK〝のど自慢〟を」（『文藝春秋』二〇〇六年三月号）。
(17) 菅義偉総務副大臣がNHKに対してかなりの影響力をもっていたことは、その著書『政治家の覚悟―官僚を動かせ』（二〇一二年、文藝春秋企画出版部）によって知ることができる。
(18) 呉正男「NHKのど自慢イン台湾、陳情・署名運動について」（『台湾協会報』二〇一一年七月一五日号）。
(19) 『産経新聞』二〇〇九年五月一八日。
(20) 「日本の前途と歴史教育を考える議員の会」のNHK福地会長に対する質問とその回答については、中山成彬「〝議員の会〟を欺いた二通の回答書」（『正論』二〇〇九年八月号）。
(21) NHK経営委員を二〇一〇年六月に退任した小林英明弁護士は、NHKが放送した日本の台湾統治を描いた番組について「放送法違反ではないか」と経営委員会の場で執行部にただした。しかし、その問題提起はきちんと議論されないまま立ち消えになったという（「直言NHK―小林英明氏に聞く・下」『産経新聞』二〇一〇年八月二三日）。
(22) 『朝日新聞』二〇〇九年九月一六日朝刊「メディアタイムズ―台湾で拡がる困惑、日本の植民地統治を批判、NHK番組」。
(23) 文化チャンネル桜のスタッフによる現地でのインタビューはインターネットで直接見ることができる。
(24) NHK放送総局職員X「こんなに杜撰だったJデビューの制作現場」（『正論』二〇〇九年八月号）。
(25) 台湾日本人会山本幸男総幹事談話（二〇一二年三月二二日）（以下山本談話と略す）。
(26) 台湾の東日本大震災に対する日本支援と日本の受け止め方については、池井優「ありがとう、台湾」（同人誌『蕗』二九五号、二〇一二年一月）。

(27)　前掲山本談話。
(28)　今井理絵「〝NHKのど自慢イン台湾〟が終わって」（『さんご』二〇〇一一年一一月号）。
(29)　同右。
(30)　許皝君談話（二〇一二年三月二五日）。
(31)　予選、本選の実際については本選合格者高橋真理子さん談話（二〇一二年三月一九日）。
(32)　予選、本選を含めて「NHKのど自慢イン台湾」をめぐる現地の雰囲気については、与那原恵「老若男女、歌え台湾！〝NHKのど自慢〟がやってきた」（『東京人』二〇一一年一二月号）、与那原恵「〝のど自慢〟は台湾でも大人気」（『文藝春秋』二〇一二年三月号）。
(33)　台湾日本人会草野浩一郎理事長談話（二〇一二年四月二日）。
(34)　台湾の原住民については、山本春樹、バスヤ・ボイツオス、黄智慧、下村作次郎『台湾原住民族の現在』（二〇〇五年、草風館）。
(35)　今井正交流協会代表談話（二〇一二年三月二〇日）。
(36)　山下晋一前日本航空台湾支店長「NHKのど自慢イン台湾」（台湾日本人会五十周年、台北市日本商工会四十周年記念特集号、二〇一二年六月）。

※本稿作成に当たり次の方々に資料提供、インタビューなどでお世話になりました。お名前と所属を記して謝意を表します。（五〇音順、敬称略）

渥美壽賀子（交流協会）、今井正（交流協会）、今井文子（玉蘭荘）、今井理絵（ボランティア）、内片貴子（玉蘭荘）、内田真美子（内田元交流協会代表夫人）、大谷麻由美（毎日新聞台北支局）、郭清来（台湾歌壇）、河野明子（交流協会）、許皝（東呉大学）、草野浩一郎（台湾日本人会）、呉正男、周義卿、周正信（台湾住友商事）、菅野敦志（名桜大学）、高橋真理子（のど自慢出演者）、張文芳（友愛グループ）、山本幸男（台湾日本人会）、吉村剛史（産経新聞台北支局）、林理果（台湾日本人会）

付記　次の方々に本論文を草稿の段階で読んでいただき、事実の誤りなど訂正していただきました。本稿の内容については筆者が全責任を負うものですが、不測の誤りが避けられたのはこの方々のお蔭です。今井理絵、内田真美子、呉正男、張文芳、山本幸男、林理果の皆さんです。